

P-181

通院治療センター30床の運用と今後の課題

諏訪赤十字病院 看護部

○折井こずえ、原 慎吾、長谷部優子

平成24年1月より10床で運用していた外来化学療法室を、30床の通院治療センターとして拡張した。通院治療センター開設前に、年次推移からがん化学療法の自然増加率は1.3倍、入院化学療法から外来移行できる人を含めると平成23年から1年間で1.6倍の患者数になることを試算した。そのため拡張に伴い、看護師数を4人（常勤換算3.74）から、8人（常勤換算6.88）に増員し、管理者を置く体制とした。また、受付から会計まですべて通院治療センターで行うため、診察介助のための看護師を外科リリーフで補っている。患者数は平成23年一日平均15件から、開設後一日平均19件と増加した。実施人数は最大44件、最小8件であり、曜日によって大きくばらつきがあるため、診療科ごとの予約枠の変更を行い、効率的な運用に向けた調整を図っている。看護体制はそれまで受け持ち患者を決めず、看護師皆で看ていた。患者数の増加により責任の所在が不明確で、医療事故発生の危険から、看護師1人が4～5人の患者を受け持つ方式に変更した。また、実施人数の増加や採血、診察介助等の新たな業務が発生した。このことにより業務の調整や、安全確保、突発事象への対応を行うリーダー看護師を新たに設けた。しかし、1日30件を超える実施数になるとリーダーが受け持ちを持つことになるという問題が起きている。今後の課題として、以下三点をあげる。1、通院治療センターにおける適正な看護配置人数の明確化2、予約確認や内服確認等医師の補助業務による看護業務の煩雑化を抑えるための医療クラークの導入3、実施人数の増加に対応できる、パートナーシップ、チーム制等の看護体制の検討、である。通院治療センター30床の運用はまだまだ多くの課題がある。これらを解決し安全で質の高い通院治療センターの看護を目指したい。

P-183

外来患者のニーズに対応した外来看護相談室運営への取り組み

高松赤十字病院 看護部

○穴吹いづみ

はじめに 外来看護の重要性が指摘されて久しい。外来においては、疾患の悪化予防、QOLの維持向上、また不安や心配が少なく治療や療養を継続できるような関わりが、求められる。しかし、診察介助が優先され、患者への個別の関わりや指導が十分ではない状況である。多様化した外来患者のニーズに対応するため、平成19年外来看護相談室を開設、運営している。これまでの取り組みについてと、今後の課題について報告する。1. 外来看護相談室運営の実際 1) 目的：セルフケアや自己管理能力を高め、QOLの向上を図る。外来、入院での治療や検査が安心して受けられる。2) 業務内容と実施件数（平成23年度月平均）：主な業務は(1)手術・検査前、入院オリエンテーション、情報収集(170件)(2)相談・生活指導(20件)(3)退院後初回外来受診時の病棟看護師による面接(32件)(4)慢性疾患患者(糖尿病、在宅酸素療法など)への療養指導(110件)である。3) 要員：看護師長1名(専従)と看護師1～2名(6つの病棟より派遣)。有資格看護師、関連病棟看護師など。2. 成果と課題 落ち着いた環境と時間を確保してのオリエンテーションや指導が可能となり、外来や入院時の病棟業務の軽減にもつながった。また、退院後や通院中に継続した個別の指導や関わりができ、再入院の予防などに役立っている。しかし、(1)(2)に関しては日替わりスタッフが担当のため、指導や相談の質の保証が難しく、スタッフの負担感も少なくない。また(2)についての利用が少なく、外来患者のニーズに十分対応できていない。今後は、業務の質の向上とスタッフの満足度の向上、また外来看護師などとの連携により必要な生活指導などが行えるような取り組みが必要である。

P-182

在宅療養での内服管理可視化の取り組み

大分赤十字病院 訪問看護ステーション

○生野 秀子、竹中 愛子、田邊美智子、佐々木和巳

はじめに A病院に併設するB訪問看護ステーション(以下Bステーション)は医療と看護の地域完結を目指した退院調整システムを構築し11年目を迎える。退院調整の一環として病棟看護師と協働し退院指導を行い特に入退院の繰り返しを退院支援スクリーニング項目の重点項目として対象者に訪問看護のサービスの導入を進めている。Bステーションでは入退院の繰り返しの要因が内服管理にあるのではないかと推測し内服薬の管理・指導を重点的に行ってきた。さらにH23年度から内服管理の可視化を目標として訪問看護利用者全員に薬カレンダーを使用し利用者とも協同して内服管理を行う方法を導入したところBステーション利用者の入退院率が減少したので報告する。方法 対象：訪問看護導入前の一年間で2回以上の入院、又は入院期間が2ヶ月以上に延長した患者が退院後訪問看護を導入したH22年度13名、H23年度18名。(終末期、創傷ケア目的の短期間利用者を除く)方法：訪問看護サービス開始後2ヶ月間での再入院回数の比較検討を行う。結果 H22年度13人中5人、H23年度18人中1人が訪問看護導入後2ヶ月以内に緊急入院していた。考察 入退院を繰り返す患者は内服薬に対してコンプライアンスが総じて低い傾向にあることが多い。H23年度の薬カレンダーを利用した内服管理によって利用者と訪問看護師が内服状況を一緒に確認する行為を可視化することができた。訪問看護師は内服薬の影響を踏まえ体調のアセスメントを行った。そのアセスメントを利用者に伝え体調管理をすることで利用者の内服治療のコンプライアンスを高めることができ病状が安定したと判断される。まとめ 薬カレンダーを使用した内服管理の可視化は内服治療のコンプライアンスを高め病状を安定させることに有効である。

P-184

看護記録を活用した外来パート看護師の患者のそばに在る看護をめざして

前橋赤十字病院 看護部(外来)

○高木あけみ、羽入かず枝、高橋 直子、横澤 佳奈、中西 文江、六本木京子

【目的】 当院の血液内科・糖尿病内分泌内科・腎臓内科の外来では、微細な体調の変化により急激に状態が悪化する患者やセルフケアが思うようにできず悩んでいる患者が多い。外来では、一定の時間に多くの患者対応が求められ、患者の情報収集や把握と共に実践した看護を限られた時間で記載するという効率性も求められる。そのような状況ではあるが、中途採用パート看護師は週に8時間～32時間ほどの勤務であり、午前中の慌ただしい業務をこなす中で看護記録の記載は、精神的にも負担が強く困難であることが多い。フォーマットの活用で記録を短時間ででき、その内容を読むことで次の看護への教育の場になり、患者の思いを処置の合間にキャッチし、生活に合わせた看護介入につながったので報告する。

【方法】 2009年～2011年に勤務している中途採用のパート看護師と常勤看護師にアンケートを行った。カルテのフォーマットは、患者の状態や心理状態の判別や各段階での具体的な看護の介入について作成を行った。電子カルテ入力時に読みながら、フォーマットの内容を削除していく形とした。

【結果】 病院勤務に慣れず、当初処置中心の勤務の中で、何を観察していいのかわかずに迷った時に読み学習しながら、短時間で記録を入力することができた。電子カルテに慣れ今後の看護につながった意見が多かった。

【考察】 外来では、業務と共に限られた時間でこの患者に必要な看護が何かを判断することが求められる。このフォーマットの作成により、病棟での経験や内科での看護経験がなく勤務時間の短いパート看護師が、短時間で記載可能になり、外来での記録の定着化と得た情報をどのように看護に活かすのかのアセスメント能力の向上につながった。